復活節第４主日礼拝説教「そこに愛はあるのか？」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年４月21日

【旧約聖書日課】イザヤ書　62章1～5節

1 シオンのために、わたしは決して口を閉ざさず
エルサレムのために、わたしは決して黙さない。
彼女の正しさが光と輝き出で
彼女の救いが松明のように燃え上がるまで。
2 諸国の民はあなたの正しさを見
王はすべて、あなたの栄光を仰ぐ。
主の口が定めた新しい名をもって
あなたは呼ばれるであろう。
3 あなたは主の御手の中で輝かしい冠となり
あなたの神の御手の中で王冠となる。
4 あなたは再び「捨てられた女」と呼ばれることなく
あなたの土地は再び「荒廃」と呼ばれることはない。
あなたは「望まれるもの」と呼ばれ
あなたの土地は「夫を持つもの」と呼ばれる。
主があなたを望まれ
あなたの土地は夫を得るからである。
5 若者がおとめをめとるように
あなたを再建される方があなたをめとり
花婿が花嫁を喜びとするように
あなたの神はあなたを喜びとされる。

【使徒書日課】ヨハネの黙示録　3章14～22節

14ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実
で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。15「わ
たしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、
冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。16熱くも冷たくもなく、なまぬるい
ので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。17あなたは、『わたしは
金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨
めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かって
ない。18そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわた
しから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、
見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。19わたしは愛する者を皆、
叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。20見よ、わたし
は戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれ
ば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事を
するであろう。21勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたし
が勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。22耳ある者
は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。」』」

【福音書日課】ヨハネによる福音書　21章15～25節

15食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人
たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わた
しがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わ
たしの小羊を飼いなさい」と言われた。16二度目にイエスは言われた。「ヨハネ
の子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあな

たを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの
羊の世話をしなさい」と言われた。17三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子
シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛
しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは
何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知って
おられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。18はっきり言っ
ておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行ってい
た。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくな
いところへ連れて行かれる。」19ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現す
ようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話し
てから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。
20ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。
この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、裏
切るのはだれですか」と言った人である。21ペトロは彼を見て、「主よ、この人
はどうなるのでしょうか」と言った。22イエスは言われた。「わたしの来るとき
まで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係がある
か。あなたは、わたしに従いなさい。」23それで、この弟子は死なないといううう
わさが兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスは、彼は死なないと言われたの
ではない。ただ、「わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたしが望ん
だとしても、あなたに何の関係があるか」と言われたのである。
24これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わた
したちは、彼の証しが真実であることを知っている。25イエスのなさったことは、
このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、
世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。

「わたしに従いなさい」【こども説教のために】

ご復活なさった主イエスが湖で弟子たちとお会いくださったとき、弟子のペトロは、最後の晩餐で主イエスが繰り返しお教えくださった「掟」を思い出していたことでしょう。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 13:34、同 15:12）。ペトロは、主イエスが逮捕されたとき、一度はその後について行きましたが、人々から問われると、「わたしはあの人の弟子ではない」と言って、見捨ててしまったのです。主イエスが愛してくださったように主イエスを愛することが、ペトロにはできませんでした。ご復活されたお姿の主イエスは、そのペトロに言われました、「**わたしを愛しているか**」。三度も、そう言われました。ペトロは、主イエスが最後の晩餐でおっしゃられたことを思い出していました、「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（同 15:15）。主イエスは、「友よ」とお呼びくださった弟子たちのために、命を捨ててくださいました、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（同 15:13）と。けれどもペトロには、あのとき、できませんでした。今ならできるでしょうか。

「今は、そうしたいと願っている」。ペトロは、きっとそう思ったことでしょう。ご復活の主イエスは、おっしゃるのです、「**わたしに従いなさい**」と。今なら、友のために自分の命を捨てて愛することが、できるでしょう。

ご復活の主イエスを迎える

今日もわたしたちは、ご復活の主イエスをお迎えして、礼拝の交わりに加えられました。どこにも主イエスの肖像は飾られてなくても、わたしたちは、ここでご復活された主イエスのお姿を見ています。空想ではなく、幻影を見ているのでもなく、わたしたちは、共に礼拝に招かれてきたお互いの間に、ご復活されたお姿の主イエスを見ているのです。

わたしは、牧師として日曜日の朝、できるだけ会堂の入口に立って、おいでになる皆さんをお迎えするようにしてきました。8 年前、石神井教会に着任した当初、日曜日の朝、会堂入口に牧師が立っていると、「牧師が礼拝前にこんなところに立っていては…」と何人もの方に言われました。「礼拝前、牧師は挨拶などせずに、一人静まって礼拝に備えてほしい」ということだったのでしょう。けれども、わたしにとって、日曜日の朝に皆さんをお迎えすることは、ご復活の主イエスをお迎えすることと一つなのです。皆さんをお迎えせずに、ご復活の主をお迎えすることはできない、と思うのです。毎週お休みせずにおいでくださる方も、久しぶりにいらっしゃった方も、初めての方も、わたしは、ご復活の主をお迎えするようにお迎えしたい、と考えているのです。それでも、付け加えて正直に言えば、いつもの方を、いつものようにお迎えできることが、わたしにとっては、何よりもよい礼拝への備えになっているのです。

主イエスの弟子たちは、湖でご復活の主をお迎えしました。湖畔で食事の準備をしてくださっていた主に迎えていただいた、と言ったほうがよいかもしれません。それは、彼らにとってはすでに三度目のことで、「あなたはどなたですか」と問いただ（ヨハネ 21:12）す必要もないことでした。友が友を迎えて食事をするのに、互いを確かめ合うことなど必要なかったのでしょう。確かに、主イエスは、あの「最後の晩餐」の席で、「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（同 15:15）とおっしゃってくださったのです。

当時よく知られていた「ダモンとピュティアス」と呼ばれるギリシアの伝説があります。太宰治の小説「走れメロス」の元になった伝説です。王から死刑判決を受けたピュティアスが、友人のダモンを人質に残して家族のもとに行き、約束通りに戻ってくる、という説話です。人質になったダモンも、人質の友人を見捨てることなく死刑覚悟で戻ってきたピュティアスも、共に真実の友情を示した物語として、長く語り継がれてきました。

主イエスや弟子たちは、この伝説を知っていたのでしょうか。知らなかったとしても、その友情のあり方を、主はご存じでした。主は、「最後の晩餐」の席で、確かに、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と教えられたのです。

愛している？

シモン・ペトロは、ご復活の主を迎えたとき、友と再会したような思いだったのではないでしょうか。

主イエスは、「**あなたがたのことを友と呼ぶ**」とおっしゃってくださっていたのです。人々に捕らえられ、大祭司の前に引き出され、総督ピラトの裁判をお受けになり、死刑判決をくだされたお方は、「友」と呼んでくださったお方でした。けれども、その友が捕らえられ、死刑に処せられたとき、ペトロは、そのお方の友でいることができなかったのです。友のために自分の命を捨てることが、できなかったのです。

それでも、そのお方は、戻って来てくださったのです。「友」として戻って来てくださったのです。ペトロが死なないように、ペトロが生きていけるように、戻って来てくださったのです。

ペトロは、ご復活されたお姿の主イエスに「**わたしを愛しているか**」と問われました。主イエスは、ペトロの愛を確かめられたのです。確かに、ペトロは、主イエスが捕らえられたとき、最後までつき従うことができず、見捨ててしまったのです。ペトロは、主イエスから「友として自分の命を捨てるほどに愛しているか」と問われていると受けとめたのでしょう。だからこそ、「**わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです**」と三度、同じように応じました。

ペトロは願っているのです。自分のことを「友」とお呼びくださるお方のことを、自分も「友」として愛したいと願っている。「友」として自分の命を捨ててもよいと思うほどに愛している。その願いを貫くことできず、自分の愛の限界を目の当たりにさせられた。それでも、自分のことを「友」とお呼びくださるお方、すでにご自分の命を捨てて「友」を愛してくださったお方を、今、自分は、「友」として愛したいと願っている。目の前に迎えたお方を。

わたしは、日曜日の朝、教会で皆さんをお迎えしながら、思うことがあります、「自分は、死んだ友らのことも迎えて、礼拝に臨もうとしている」と。母教会での青年時代、病死した教会の友人らのことを思い起こすのです。二人とも、生前、神学校に進みたいと願っていましたが、叶いませんでした。もしも生前相談されていたら、わたしは彼らに「やめとけ」と言ったでしょう。死んだ後に、牧師から彼らの願いを聞かされました。彼らは、今も生きていたら、わたしにとってただの「教会の悪友」の一人に過ぎなかったかもしれません。けれども、死んだ今、彼らは、わたしが牧師として日曜日の朝、教会にお迎えする皆さんと共にお迎えする「ご復活の主」の姿をした一人なのです。皆さんと共に、わたしは、死んだ先達の皆さんを、「ご復活の主」のお姿をした方々として、今日もお迎えしました。